



呼唤和平

原民喜

(翻译 李轶伦)

《知识分子战线》(《个性》七月号)和《拥护和平》(《近代文学》八月号)深深地吸引了我。我觉得这两个特辑是近来最有意义的。这样的特辑今后也应该不断地办下去,越多越好。可以说,对于我们这些从战争灾难中幸免的人来说,这才是我们最重要的也是最后的课题。

经历了一九四五年八月六日广岛惨剧的我,每年一到那一天就会感到新的战栗和剧痛。三年后的夏天,我在本子上如是写道:

写于第三个夏天

从原子弹的爆炸中逃生之后,当你全身在崩溃却要奋力站起时;身边到处是人间炼狱的惨叫声时;并且,之后还要与饥饿抗争,拼命地活下去时,试问,你为什么一定要活下去?你活下去的使命是什么?回答!回答!快说出答案!

如果只是到日本投降的时期为止的话,对我们来说,关于原子弹惨祸的记述还是可能并能够理解的。可如果核武器今后在地球上还被使用的话,恐怕人类将会灭绝,世界上只剩下爬虫类在阴郁的草木中四处乱爬乱窜。

希望发动战争或肯定战争的人一定心怀侥幸和冷漠,他们认为就

算有上百万人惨死于战祸之中，自己也能幸免。当然，在过去的战争中有这样的可能，可我们要记住，今后的战争会把每个国家、每个人都引向死亡和灭绝。

“我们应该牢记：每个人只在心中呼唤和平不一定能够防止战争，但如果人们心中承认战争的存在，人类就迟早会自己走向灭绝。”（平田次三郎）归根结底，“能防止战争的是我们每一个人。”（杉捷夫）

对和平的拥护和贡献，需要每个人不断的忍耐和关注。今天，冷静地回顾一下自己和周围，就会清楚地发现，一切为了战争的那种环境是如何病态地扭曲了所有人们的心理，并贻害至今。与这个地狱抗争并获得重生需要的就是无限的爱和忍耐。



（日本語原文） **平和への意志** 原民喜

二つの特輯^{とくしゅう}が私の心を惹^ひいた。知識人戦線（個性七月号）と平和の擁護（近代文学八月号）と、これは近頃、最も意義ある特輯だったが、こうした特輯は今後も絶えず繰り返して為されなければならないし、何度繰り返しても多すぎるといふことはあるまい。極言すれば、戦災死をまぬがれたわれわれにとって、これこそは最大の、そして最後の課題なのだ。

一九四五年八月六日、言語に絶する広島^{ひろしま}の惨劇を体験して来た私にとって、八月六日という日がめぐり来ることは新たな戦慄とともに、いつも激しい疼^{うず}きを呼ぶ。三度目の夏に、私は次の如くノートに書き記しておいた。

三度目の夏に

お前が原子爆弾の一撃より身もてのがれ、全身崩れかかるもののなかに立ち上がろうとしたとき、あたり一めん人間の死の渦の叫びとなったとき、そして、それからもうちつづく飢餓に抗してなお生きのびようとしたとき、何故にそれは生きのびようとしなければならなかったのか、何がお前に生

きのびよと命じていたのか——答え、答え、その意味を語れ！

原子爆弾の惨禍も、それが日本降伏までの時期のものならば、まだわれわれにとって、描くことも描かれたことについての理解も可能であろう。だが、もしも原子力兵器が今後地球で使用されるとするならば、恐らく人類は完全に絶滅し、陰々として草木が密生する地上を爬虫類のみがいたずらに跳梁^{ちょうりょう}する光景が残されるばかりではあるまいか。

一人の人間が戦争を欲したり肯定する心の根底には、他の百万人が惨死しても己れの生命だけは助かるという漠たる気分が支配しているのだろう。無論、過去の戦争においては、そうした事もあり得た。だが、戦争は今後、あらゆる国家あらゆる人間の一人一人を平等に死滅に導くということを特に銘記すべきだ。

「人々の心の中でのみ戦争は防止できぬが、人々の心の中で戦争を承認するときは、ついに人類は自滅せざるをえない段階に立ちいたることを、われわれは心に焼きつけようではないか！」（平田次三郎）

結局「戦争を防ぐのは我々であり、我々の一人一人である。」（杉捷夫）

平和の擁護、平和への協力は、絶えざる忍耐と緊張を一人一人に要請するであろう。今日己れと己れの周囲を少し静かに顧み^{かえり}れば、戦争のために存在したかつての環境が、いかに人間全体の心理を病的に歪曲したか、現に今も傷害しているかは、あまりにも明らかなことがらである。この地獄と抵抗して生きるには無限の愛と忍耐を要する。

.....

本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編輯室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。